

魚嫌いの英雄たち：古代ギリシア文学における食文化についての考察

著者	野? 王偉
雑誌名	表現学部紀要
巻	23
ページ	53-69
発行年	2023-03-17
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004976/

魚嫌いの英雄たち

——古代ギリシア文学における食文化についての考察

野瀬王偉

——要旨

本稿では古代ギリシアの吟遊詩人ホメロスによる英雄叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』に共通してみられる「英雄が魚を食べない」という一つの特徴に着目し、その理由を明らかにしようと試みた。

古代ギリシアにおいて、海産物が盛んに食べられていたことは、当時の料理書やギリシア喜劇といった文献や考古学的発掘などからも明らかであるが、奇妙なことにホメロスには魚食を示唆する場面は比喩表現などわずかにしか見られず、英雄が海産物を食べる場面は存在しない。

本稿ではまず、ホメロスの英雄叙事詩について考察を進めたのち、ホメロス以後の英雄叙事詩、ギリシア悲劇、喜劇、小説、哲学といった異なるジャンルの文献も検討した。その結果、「英雄が魚を食べない」という特徴がホメロス以外にも見られることを確認し、そうした描写の背景にある意図の考察を行った。

はじめに

古典屈指の傑作である吟遊詩人ホメロスの英雄叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』には、古代より度々取り上げられる一つの奇妙な点がある。それは、全編を通して登場人物である英雄たちがただ一度も魚を食べていないという点である。私の知る中で、この問題を最初に指摘したのは、哲学者のプラトンである。彼は『国家』において、ソクラテスの声を借りてこう述べている。

「君も知っているように、彼は陣中での英雄たちの宴会において、彼らに魚をふるまってははいない。それも、場所はヘレスポントスの海岸だというのに。また肉も煮たのは出さないで、焼いたのだけをふるまっている。」（『国家』404c）

また、『食卓の賢人たち』の著者である2世紀頃の作家アテナイオスもプラトンと同様の疑問を持っていたらしく、このように述べている。

「ホメロスは、英雄たちが野菜や魚や鳥を食べるさまを描いてはいない、こういうものは道楽者の連中のやることだし、それにもうひとつ、こういうものを調理するというのはふさわしくない、英雄や神々にさせるのは畏れ多い、と考えたからだ。」（『食卓の賢人たち』25d）

英雄が魚を食べないという点は当時から無視できない問題として取り上げられており、わが国においても藤縄謙三氏（『ギリシア神話と風土』P.86）や、丹下和彦氏（『食べるギリシア人』P.28）といった研究者によって指摘されている。

ホメロスの英雄叙事詩

実際に『イリアス』『オデュッセイア』を見てみると、食事の際、狩猟による食糧の調達、材料や調理法、犠牲の様子といった食事の前後まで、かなり緻密に描写されているにもかかわらず、いかなる状況であっても魚を食べてはいないことがわかる。漂流中のオデュッセウスは常に食べ物に飢えていたというのに、食べるのは狩りなどを行って手に入れた肉やパン、そしてギリシア人の血ともいえるワインのみなのである。例として、『イリアス』からアキレウスがオデュッセウスに料理を振舞う場面を引用する。

「アキレウスは大きな肉切台を炉の火のあかりのさす辺りに持ち出し、羊と肥えた山羊の背肉と、肥えて脂のよくなった豚の腰肉を置き、アウトメドンにそれを抑えさせて、自分でそれを大切に切ってゆく。さらにまた念入りに細かく切り、串に刺す。神にも見まごうメノイティウスの子が、赤々と火を燃やし、燃え尽きて焰も弱まった頃を見はからい、おきを敷き並べてその上に串を置き、串の両端を串台に支えて、聖なる塩をふりかける。焼き上がると大盆に盛り、パトロクロスがパンをとり、美しい籠に入れたのを四脚机の上に並べると、肉はアキレウスがそれぞれの分をとりわけ。アキレウスはオデュッセウスに相對して、向う側の壁際に坐り、戦友パトロクロスに、神々に贅を奉れと言ひ付け、パトロクロスは供物の肉を火に投じた。」（『イリアス』第九歌 199）

このように、ホメロス作品においては基本的⁽¹⁾にパン、ワイン、肉（ウシ、ブタ、ヤギ、シカなど多岐にわたる）⁽²⁾以外を口にすることはない。またプラトンのいうように、肉を調理する際も、ただ焼くのみで調味料⁽³⁾を使ったり、肉を柔らかくするための伝統的な調理法であった一度煮てから焼くといった調理⁽⁴⁾も行わない。

ホメロスにおいて、魚食を示唆する場面は『イリアス』においてはほぼ見られず、『オデュッセイア』にわずかに二箇所見られるのみである。それは遭難したメネラオスの部下た

ちが、空腹に耐えかねて行った行動と、同様の理由でオデュッセウスの部下が食糧を捜す場面である。

「仲間たちは飢えた胃の腑をさいなまれ、常時島中を徘徊しては、曲がった釣針で魚を獲っていたのだ」(『オデュッセイア』第四歌 351)

「部下たちも、穀物と赤い酒のある間は、さすがに命が惜しくて牛には手を付けなかったが、やがて船内の貯えも悉く尽きると、もはや背に腹は代えられず、獲物を求めて歩き廻り、魚であれ鳥であれ、手に入るものは何でも、曲った針で捕えたりしていた。」(『オデュッセイア』第十二歌 324)

これらの場面のメネラオスやオデュッセウスからは、たとえ飢えても仲間のように魚を獲って食べたりはしないという意思が感じられる。どちらの場面も、魚を捕まえて食べようとしているのは彼らの部下たちで、二人はそれを憐れむように見ているという構図である。つまりホメロスの英雄叙事詩において、英雄はどんな状況にあらうとも魚を食べようとはしていないのである。

魚好きのギリシア人

古代のギリシア人が魚好きであったことは、様々な文献から明らかである。ホメロスの叙事詩においては、パンとワインという伝統的な主食に加えて、いかなる時も肉ばかりを食べているが、実際には魚介類が中心だった。ギリシアは放牧地に乏しく、牛は農耕用、羊は毛を刈るのに使うため、特別な儀式などを除いてあまり食べられることはなかった。彼らは我々と同じように、マグロ、ナマズ、ウナギ、ボラ、タイ、イカ、タコ、ウニといった多くの魚介類を獲り、ときに養殖まで行って食卓に供していた。たとえば、ギリシア人の最も好きな魚はウナギであったり、アテナイの港パレーロンはイワシの名産地として有名だった。これらの魚好きの一面は、特にギリシア喜劇において顕著である。

ホメロスの生きたとされる紀元前8世紀頃に魚食が行われていなかったというのも考え難い。『イリアス』にこのような場面がある。

「ああ、なんと身軽な男よ、実に造作もなくとんぼがえりを打つ。この男なら魚の群れる海におれば、荒波もものかは船上から跳び込んで牡蠣をいくらでも捕え、多数の者の腹を満たしてくれるであろう、丁度いま野原の上で、鮮やかな車からとんぼを切ったようにしてな。きっとトロイエ勢の中には、こんな曲芸師が幾人もいるのであろう。」(『イリアス』第十六歌 745)

これはパトロクロスがヘクトルの御者であるケブリオネスを討ち取った際に放った台詞であるが、ここから当時のギリシア人がカキ⁽⁵⁾を食べていたことがわかる。ホメロスより時代の古い、ミュケーナイ文明の遺跡からも魚の骨等⁽⁶⁾が発見されていることなどからも、ホメロスの時代に魚食が行われていたことはほぼ確実であろう。

ホメロスにおける海洋生物

ホメロスには英雄が魚食を行う場面は見られないものの、以下のように海洋生物を扱った比喩表現は度々確認できる。

「それはあたかも、穴から引き出される蛸の吸盤に、無数の小石が堅く付着しているさまにも似て、岩にすがった彼の逞しい手から皮膚が剥がれ、大波が彼の身を蔽った。」(『オデュッセイア』第五歌 424)

「それはたとえば海に突き出た岩に立つ釣人が、長い釣竿で小魚に誘いの餌を投げると、野に棲む牛の角を海中に抛り込み、もがく魚を捕えて水からあげる如く、部下たちは身もだえしつつ岩に曳き上げられてゆく。」(『オデュッセイア』第十二歌 234)

ホメロスより後の人物であるヘシオドスの『仕事と日』において、ヘシオドスは自ら「航海や船については確かな知識を持たない」⁽⁷⁾と述べており、実際に作中に海洋生物の例えはわずかに一箇所⁽⁸⁾しか確認できないことを鑑みると、ホメロス自身はかなり海洋生物に明るかったことが窺える。

ホメロス以外の英雄叙事詩

これまで述べてきた問題について検討する手段として、私は古代ギリシアの様々な文学作品を当たってみることにした。初めに取り上げるのはホメロス以降の吟遊詩人による英雄叙事詩で、本稿ではローマの詩人ウェルギリウスの『アエネーイス』、アポロニオス・ロディオスの『アルゴナウティカ』、カリステネスの作として伝わる『アレクサンドロス大王物語』の三篇を見ていく。

すると興味深いことに、これらの作品内でも登場人物が魚を食べていないことがわかった。

以下のように、ホメロスに多大な影響を受け、オデュッセウスと同様に長く厳しい航海を行ったアイネイアスもリビュエの入り江に上陸し、くたくたになりながらもシカを狩って調理しており、船の上で魚を釣るなどはしていない。

「彼らは獲物を調理して宴をなそうと支度にかかる。胴から皮を剥ぎ、身を露わにすると、あるものは細かく刻んでから、まだぴくぴくと動く肉を串に刺し、ある者は岸辺に大釜を据えて火を燃やす。それから食事で力を取り戻し、草の上に横たわって年を経たぶどう酒と肥えた鹿肉で腹を満たした。」(『アエネーイス』第一歌 170)

もっとも、当時のギリシアの船は沿岸航海が基本であり、食事の際は一度陸に上がり、調理を行う⁽⁹⁾のが普通であっただろうし(木造船なので船内で火は焚けないだろう)、生食はせず、保存方法も限られている中では、あまり魚は獲らないのかもしれない。

ギリシア悲劇

次に、古代ギリシアの劇作品から悲劇の場合を見ていく。

ギリシアの悲劇と喜劇は、主にアテナイで毎年春頃に行われるデュオニュシア祭において上演されていた。ただし、喜劇の成立は悲劇よりも後になってのことである。悲劇の最初の上演は紀元前434年のデュオニュシア祭であるとされ、テスピスという人物が最初の舞台役者となった⁽¹⁰⁾。祭りにおいては、悲劇も喜劇も競演形式で上演され、毎年三名の参加者が腕を競い合った。デュオニュシア祭は三日間続き、それぞれの参加者が一日に悲劇三作品とサテュロス劇一作品を上演し、最終日に優勝者が選ばれた⁽¹¹⁾。

三篇の悲劇の上演後には、清涼剤として、サテュロス劇と呼ばれる短編の笑劇が上演された。これは半獣半人の精霊サテュロスが合唱隊を務める特殊な劇で、滑稽な笑いと下世話なジョークに彩られた、喜劇の前身とも呼べるものであった。

悲劇と喜劇を比較するうえで、前者にのみ見られる特徴としては、ギリシア神話のエピソードをもとにしていることがあげられる。裕福であるかないかは別として、一般的な庶民が中心となって物語が繰り広げられる喜劇とは異なり、神話の英雄や神々が中心となる悲劇は、性質としては英雄叙事詩に近い。物語の舞台となるのも遙か昔の英雄の時代である。これらの要素から考えると、ギリシア悲劇は神話や英雄叙事詩と同じように食文化を扱った場面は少なくなるはずであり、それは実際にそのようである。しかし、その中でもギリシア悲劇は極端に食文化の描写が少ない。

悲劇という名が示すとおり、ギリシア悲劇は神話の中の悲惨なエピソードを悲劇詩人たちがよりドラマチックに肉付けし、劇化したものである。多くの場合で、物語には常に緊張が張りつめ、登場人物にも観客にも心の休まる暇がない。鑑賞後には清涼剤ともなる滑稽なサテュロス劇が用意されているという周到さである。そのため、悲劇詩人たちは臆することなく暗く重苦しい物語を書き綴ることができただろう。終始緊張した物語の中では、人間の一般的な欲求さえ容易には満たすことはできない。穏やかならぬ精神では睡眠もままならず、食事さえ喉を通らない。ともすればこれらの際に暗殺されてしまうかもしれない危険な状況にある。欲求を満たすことは幸福へとつながる。そのため、胸の張り裂けそ

うなほどの不幸が主題となる悲劇では、場を和ませる食事といった行為は極力排除されてきたのだろう。

アリストテレスは「詩学」において、喜劇と悲劇の違いをこのように表している。

「喜劇は現に我々の周囲にいる人々よりも劣った人を再現しようと意図するが、悲劇はより秀れた人物を再現しようと意図する。」（「詩学」第二章：『アリストテレス全集』）

ここでアリストテレスの述べている「秀れた人物」は古代の英雄や神々と言い換えることができるだろう。ギリシア悲劇は神話や英雄伝説を題材としている。先に述べたとおり、ギリシア人は英雄や神々が一般の人々のように食事をする様子を描くことを極力避ける傾向にあるので、英雄の時代を扱った悲劇もそのようになったのかもしれない。ソポクレス⁽¹²⁾やエウリピデス⁽¹³⁾が、ホメロスに倣ってか横にならず、座って食事をする⁽¹⁴⁾ように描写していることから、彼らは自分たちの時代と英雄たちの時代を明確に分けて考えていたのではないだろうか。

このような理由がギリシア悲劇に食の描写を控えさせたとは私は考えている。しかし、食文化にまつわる描写のすべてが悲劇から排除されているわけではない。たとえば「アガ멤ノン」にこのような一節がある。

コロス「おお、ゼウスの御主、また親しい夜よ、すばらしい栄光をもたらした夜、トロイアの常塔の上にびっしりと投網をうち掛け、大人の者も幼い者もだれひとりとして、捕らわれの大網を逃げおおさせず、残らず捕虜の憂き目を見せたは。」（「アガ멤ノン」354-361：『ギリシア悲劇全集』）

このように、悲劇には漁業を扱った比喩がしばしばみられ、特にアイスキュロスの『オレスティア三部作』に顕著である。漁業に関する比喩はホメロスにもみられ、ギリシア人に好まれた表現であったが、網で魚を捕えるという行為が、逃れえぬ悲劇的な運命を予感させることから特に悲劇において度々みられる表現である。

また、変則的な例として、このような用途もある。

オデュッセウス「（前略）こうしてあの神の呪われ者、地獄の料理人は準備万端整うと、わたしの仲間うちから二人を引っ掴んでこれを殺した。そして腕をひと振り、一人を青銅の釜の底へ」（「キュクロプス」383：『ギリシア悲劇全集』）

サテュロス劇、『キュクロプス』からの一節であるが、ここからは被食者という原始的な恐怖をかき立てるような表現がなされている。サテュロス劇は喜劇の前身とも呼べるものではあるが、原典である『オデュッセイア』が、人間をそのままに丸呑みするといった

描写であったのに対して、『キュクロプス』では、人間を調理する場面が生々しく表現されていることから、この作品もギリシア悲劇の一つだということを思わせる好例であるといえるだろう。

ギリシア喜劇

これまで、英雄叙事詩、悲劇とギリシア神話に基づく世界観の文学作品の中にもホメロスにみられた「魚を食べない」という特徴がみられるということを書べてきたが、次にギリシア喜劇を見ていく。

ギリシア喜劇はテスピスによる悲劇の最初の公演から約50年の経過した紀元前486年にアテナイのデュオニューシア祭において公演され、紀元前440年からは冬のレーナイア祭においても公演されるようになった⁽¹⁵⁾。公演は悲劇と同様に競演の形式で行われるものの、悲劇とは異なり五人の詩人がそれぞれ一作、計五作（戦時中は三作）の喜劇が上演され、その中から優勝者が選ばれた⁽¹⁶⁾。悲劇と異なる点は、ギリシア神話的な世界観ではあるものの、描写はより日常的で登場人物も人間であることが多い。また、当時の世相に対する強烈な風刺や低俗な言い回しのほか、食に関する記述が極めて多いことがあげられる。例えば、アリストパネスの有名な一節にこのようなものがある。

リューストラテ 「いいですか、この国の行く末はわたしたちにかかっているんです。ペロポンネーソス人がいなくなってしまうか——」

カロニーケー 「そうなればほんとうに結構なことだわ。」

リューストラテ 「ボイオーティアもすっかり減びてしまうか——」

カロニーケー 「すっかりでは困ります、鰻は助けてやって。」（『女の平和』32：『ギリシア喜劇全集』）

ディカイオポリス 「こちらのソーセージには蜂蜜をかけなさい。こちらのイカは網焼きにしなさい。」

コロス 「あの甲高く響く叫び声を聞きましたか？」

ディカイオポリス 「これらのウナギを蒲焼きにしなさい。」（『アカルナイの人々』1040：『ギリシア喜劇全集』）

これまでとは対照的に、ギリシア喜劇にはウナギを始めとするギリシアの食卓を彩った魚介類のほか、ソーセージや豆粥といった料理、イチジクや蜂蜜入りの焼き菓子、携行食として一般的だったニンニクやタマネギ⁽¹⁷⁾、犠牲式の様子や宴会遊び、鍋やおろし器についている動物を模した意匠⁽¹⁸⁾まで多様な食文化が記録されている。

喜劇がこれまでの文学作品と異なる点は、喜劇が観客を笑わせたり、楽しませるために

作られたものということだろう。悲劇や叙事詩では簡略化されがちな食事の場面も、笑いや楽しいという感情を湧きたたせるために多用され、また登場人物が食べるものも現実に近いものである。リアリティが笑いをもたらすというのは現代にも通用する手法であるが、ギリシア喜劇においても、日常の延長線上にあるような滑稽な物語が、ペロポネソス戦争期のギリシア人の不安を和らげるために効果的だったのだろう。

ギリシア小説

次に、古代ギリシアの小説を見ていく。

現在、完全な形で現存するギリシア小説はそのすべてが若者同士の恋愛物語である。加えて、そのほとんど⁽¹⁹⁾が『オデュッセイア』に端を発する冒険物語の性質を帯びており、登場人物たちは地中海の島々やエジプトといった異国を旅することになる。そのなかにもこのような記述がある。

「若者たちは岸ぞいに船を進め、時々錨をおろしていたが、悪さは何もせず、いろいろな楽しみごとに興じていた。葦の竿に細い糸を結び釣り針をつけて、海中に出た岩礁から岩場の魚を釣ったり、犬と網を使って、葡萄の収穫時のやかましさを恐れて逃げてゆく兎を捕えたりしていた。また野鳥の狩もこころみ、投網であひるや鴨、それに野雁などを捕えた。つまり慰みが食膳をにぎわす役にも立ったのである。何か必要なものがある時には、村人から値段以上の金を払って買っていた。若者たちに必要だったのはパンと葡萄酒、それに雨露をしのぐ場所だけだった。」（『ダフニスとクロエー』巻二 58）

「食料は私たちが賄ったのですが、テュレノスも有り余るほどの海の幸で若者たちをもてなしてくれました。たいがいテュレノスが独りで魚を捕りに行くのですが、時にはわたしたちも暇を見つけて漁に加わりました。彼の漁の手並みときたら実に見事なもので、さまざまな漁法に通じており、どんな季節にもぴったりの技術を身につけていました。」（『エティオピア物語』巻五 18.9）

ここでは、ホメロスや英雄叙事詩で見られなかった豊富な食材の描写や、何より魚を食べる場面が見て取れる。先に述べたように、ギリシア小説は冒険物語の要素を持っており、主人公の男女は簡単には結ばれず、様々な苦難や冒険を経て大団円となる。そこでの冒険は英雄叙事詩の神々や英雄たちの旅路に引けを取らないものではあるが、食の面では大きく異なっている。

その理由は、ギリシア小説の主人公が神でも英雄でもないただの人間だということにある。ギリシア小説の世界観は、執筆された当時の風俗を反映しているものの、神々や英雄

の存在するいわゆるギリシア神話的世界観である。そのなかで小説の主人公である人間たちは、英雄と比べて、より現実に近い食事を行っている。

ギリシア哲学

次に、ギリシア哲学を見ていく。本稿ではアリストテレスを中心に検討を行ったが、そのなかでも特に「動物誌」には、陸の動物だけでなく、海洋生物についても多くの記載があり、古代ギリシア人の食文化を知る上で有力な手掛かりとなった。例としては以下のようなものである。

「タコの種類は比較的多く、一つは、最もよく見かける、タコの中で最も大きいものである（ちなみに、沿岸に生息するタコは沖合に生息するタコよりはるかに大きい）。さらに、それとは別種の小型のタコがいて、彩は華やかだが、食用にはならない。」（「動物誌」第四卷第一章 525a10-20：『新版 アリストテレス全集』）

「イソギンチャクには二種類あり、一つは小型でより食べやすく、もう一つはカルキス辺りにもいる大きくて硬いイソギンチャクである。イソギンチャクは、冬場は肉が締まっている（それゆえ、漁獲され、食べられる）が、夏場は駄目になる〔食用に向かなくなる〕。というのは、〔夏場は〕イソギンチャクはぶよぶよになり、触るとすぐ身が崩れ、〔岩から〕丸ごと剥がすことができなくなるし、暑さにやられて、いっそう岩間に引っ込んでしまうからである。」（「動物誌」第四卷第七章 531b10-b20：『新版 アリストテレス全集』）

ここには、現代のギリシア料理においても人気のあるタコに加えて、イソギンチャクも当時から食用にしていたらしいことが窺える。

実際にはこれらをどのように調理していたのかはわからないが、あらゆる海洋生物を食用にする姿こそが、より現実の古代ギリシア人に近いといえるだろう。

現実的か神話的か

これまで、英雄叙事詩、劇作品、小説、哲学と様々なジャンルの古代ギリシア文学作品を検討してきた。これらのジャンルは、食の矛盾という視点では二種類に大別出来る。それは、現実的か、非現実的（神話的）かである。

この場合、現実的な食描写と呼べるものにはギリシア小説、喜劇、哲学が当てはまる。これらの舞台は神話をモチーフとするものであっても、あくまで現実的かつ日常的な描写が多く、また多くの場合主人公は普通の人間である。

次に、食の描写について非現実的なジャンルとされるものは、残る英雄叙事詩とギリシア悲劇作品である。これはいうまでもなく、物語が神話的であるからである。これらの作品の主人公は基本的には英雄である。また、作品全般に言える特徴として食事の描写が少ない、または簡素である。悲劇に至ってはほとんどないといってよい。それは食事という行為が、これらの作品のもつ雰囲気とそぐわないからであろう。叙事詩の厳かな雰囲気、悲劇の重く物悲しい空気に幸福的な感情をもたらす食事は似合わないのである。

英雄の食卓

ホメロスの英雄たちが魚を食べないことはこれまで述べてきた通りである。加えて、今回の研究では『アエネーアス』『アルゴナウティカ』『アレクサンドロス大王物語』の三篇の英雄叙事詩においても、英雄たちは魚を食べていないことがわかった。これはホメロスの影響なのだろうか。その疑問は払拭できない。なぜなら、ホメロスのテキスト化以降、ホメロス作品は教科書として用いられ⁽²⁰⁾、一定の教養をもつ者ならば、ホメロスを知らないということはある得なかったからである。ましてや、文学作品を執筆するほどの教養ある者たちがホメロスを知らなかったとは到底考えられない。喜劇や小説などにもホメロスの引用はみられ、その影響は計り知れない。

とはいえ、この事実がプラトンやアテナイオスといった当時の知識人たちの間で疑問としてあがっていたことは先に示したとおりである。彼らの与り知らぬところで、叙事詩を詠う詩人たちの間に一種のタブーとして、英雄に魚食はさせないという決まりが浸透していたと考えるべきかもしれない。

一方で、先ほど食の描写において現実的と分類した小説や喜劇、哲学の中では、魚を食べる登場人物が多く登場している。これまでに述べてきたように、古代ギリシアでは魚食はごく一般的であり、貴族から庶民まで幅広く親しまれていた。後にギリシアから文化を吸収したローマには及ばないものの、ギリシアの魚料理もかなりの発展を遂げており、中には現代に通用するものも数多くある。

ではなぜ、ギリシアの英雄たちは魚を食べないのだろうか。

神聖な食物

ギリシア人にとって神聖な食物とは何か。それはホメロスにもあるとおり、大地の恵みであるパンとワイン、そして肉である。これは後世になっても変わらない。ギリシアにおいては、神々への捧げものの第一は牡牛であり、捧げる神々によって牡羊や豚なども捧げられた。ヘシオドスのいうように、ギリシア人は農耕、牧畜を神聖視する民族である。しかし、犠牲獣を神に捧げるという風習は狩猟民を思わせる。ホメロスにおいても、犠牲の様子は細部までほぼ完璧に描写されている⁽²¹⁾。これは狩猟民であったギリシア人の遠い

祖先からの風習であると、ヴァルター・ブルケルト (Walter Burkert) は指摘している⁽²²⁾。

ギリシア人の祖先は、紀元前 2000~2200 年頃にバルカン半島を南下してギリシアに移り住んだと考えられている⁽²³⁾。彼らは結果として紀元前 1400 年頃にミュケーナイ文明を興し、ホメロスにも言及のあるアカイア人を形成した。この間に、ギリシアの土地に根付いた彼らは狩猟民から農耕、牧畜 (おそらくは漁業も) を生業とする民族に姿を変え、犠牲の肉も狩猟から家畜へと切り替わった。しかし、彼らの伝統である肉を神々に奉納するという信仰は絶えなかったのだろう。

とはいえ、ギリシアに海洋生物を神聖視する信仰がなかったというわけではない。例として、アテナイの港、ハライ・アイクソニデースにおいては、マグロ漁の時期になると、初物のマグロが海神ポセイドンに捧げられていた⁽²⁴⁾。また、ギリシアの島嶼部では肉の代わりに魚が生贄として用いられることが少なくなかった。しかし、これらは一部の例外であって全てではない。ギリシアでは生贄は基本的には肉であった。

海の神話

ギリシア人の中にも、海に対する信仰を持つものが少なからずいたことを述べたが、実際のギリシア神話を見てみると、海や魚に関する神話は極端に少ない。

藤縄氏 (『ギリシア神話と風土』P.86) も述べているとおり、ギリシアでは農業、牧畜、狩猟、漁業が第一次的な産業であり、神話もそれを反映する形で作られてきた。しかし、海や漁業に関する神話は、漁師グラウコスの神話、ペルセウスやディオニュソスの一部の神話など、わずかにしか存在せず、またそのどれもがさほど重要なエピソードではない⁽²⁵⁾。有名な海神と言えば、もちろんポセイドンがいるが、この神も元は大地の神であり、神話としても海よりも大地との結びつきが強い。他の海神たちも重要な存在であるとは言い難い。加えて、『オデュッセイア』に代表されるように、ギリシア神話の海は多くの怪物の住まう異界的側面が強い。トロイア戦争を戦い抜いた英雄たちも、アイアスは海に飲まれ、オデュッセウスは長い間行方不明、メネラオスも胸の張り裂ける想いでようやく帰国した。このように、漁師を除く内陸のギリシア人たちは皆、海に対して畏怖の念を持っていたように思われる。

また、漁業が軽視される理由の一つには、ギリシア人が農耕を重視する民族であったことも無関係ではないだろう。ヘシオドスが『仕事と日』で述べているように、模範的なギリシア人のあり方とは、穀物を育て、大地の女神や父神ゼウスに祈りを捧げることであった。

ホメロスの神々

ギリシア神話の特徴の一つとして、神々がとても人間的であることがあげられる。特に

ホメロスではそれが顕著である。ギリシアの神々は、他の神話と比べてとても欲望に素直だし、誰が一番美しいかを争ったり、ヘラに至っては人間の女性のように化粧をし、香油を塗って美しい衣で着飾ってまでいる⁽²⁶⁾。人間と同じように宴会をし、眠ることもある。このような神々と人間とを明確に分けているものこそが、不死であるという点である。そして、英雄と神々とを決定的に区別するものもここにある。ギリシア神話の英雄はいわば死すべき神である。

ギリシア神話では、不死は後天的に与えられる場合もある。そのための方法は身体を冥界の河に浸ける⁽²⁷⁾、火中に投ずる⁽²⁸⁾、霊草を食べる⁽²⁹⁾と様々あるようだが、これらはたいてい失敗している。もっとも確実なものはネクタルとアンブロシアの名で呼ばれる神々の食物を食べることである。ホメロスにおいても、神々は宴会の際、ネクタルを水で割り、アンブロシアを食べている。そのなかでも、特に重要と感じるのは、『オデュッセイア』の以下の場面である。

「先刻ヘルメイアスが立って行ったばかりの椅子に、オデュッセウスが腰をおろすと、仙女はその傍らに、人間の口にするさまざまな食物と飲料とをならべる。仙女がオデュッセウスに向かい合って坐ると、侍女たちがアンブロシアとネクタルとをその傍らに置く。」（『オデュッセイア』第五歌 192）

ここで注目すべきは、英雄オデュッセウスと女神カリュプソの食べ物の違いである。ここでは極めて明確に不死なる神々と死すべき英雄との違いを食物という形で表現している。『イリアス』においても同様に、神々と英雄（人間）とを区別するものが食物にあることを示唆する記述が見られる。

「神々は穀物の類いを口にせず、きらめく酒を呑むこともない。さればこそ神々に並みの血は流れておらず、不死なるものと呼ばれもする。」（『イリアス』第五歌 318）

これらからわかるように、ホメロスは神々と英雄とを食物の違いという形で明確に区別していた。

そして、このことは、ホメロスが意図的に英雄たちに魚を食べさせなかったという根拠となりうる。ホメロスは、人間と英雄との違いを魚を食べず、いかなる時も神への供物となる神聖な食物であるパンや肉を食べる存在として定義していたのである。

魚は副食品

いま一度、この問題についての古代の先駆者たるプラトンとアテナイオスの一節を引用したい。

「というのは、君も知っているように、彼は陣中での英雄たちの宴会において、彼らに魚をふるまってははいない。それも、場所はヘレスポントスの海岸だというのに。また肉も煮たのは出さないで、焼いたのだけをふるまっている。確かに兵士たちには、それがいちばん簡単に用意できるものだろう。どんなところでも、じかに火だけを使うほうが、鍋釜を持ちまわるよりも簡単だといってよいからね」（『国家』404c）

「しかしホメロスは、英雄たちが野菜や魚や鳥を食べるさまを描いてはいない、こういうものは道楽者の連中のやることだし、それにもうひとつ、こういうものを調理するというのはふさわしくない、英雄や神々にさせるのは畏れ多い、と考えたからだ。」（『食卓の賢人たち』25d）

以上の一節で、アテナイオスは魚を食べない英雄について、かなり鋭い考察を述べている。確かにアテナイオスのように魚や野鳥などを使った料理は宴会において供される贅沢な料理であったかもしれない。そして、アテナイオスの時代にあったような飽食で墮落した美食家たちの料理は英雄や神々に食べさせるにはふさわしくない料理であるはずである。

ギリシア語では副食品（おかず）はオプソンと呼ばれる。意味としては日本語のおかずよりも広く、主食と飲み物以外のほぼすべてを包括している。先ほど述べた「美食家」はオプソパゴスと呼ばれ、その意味は「オプソンを食べる人」である。

オプソンの意味はおかず全般であるので、ここには当然調理された肉類も含まれていたが、ギリシアでは美食家（オプソパゴス）は主に魚に目がない人を意味していた。ここにまさにオプソパゴスと呼ばれたフィロクセノスの残したとされる詩がある。

「やさしい子が銀の水差しから手に水を注いでくれる。美しく細い銀梅花の小枝の花輪。二人の奴隷がピカピカに磨き上げたテーブルを次から次へと運び入れ、部屋が一杯になる。

雪のように白い大麦のロールパンが籠に盛られて来る。キャセロール、いや、もっと大きいマーマイトという鍋にはアナゴのような堂々たるウナギがはちきれんばかりに身を縮めている。

かたわらにはハチミツをまぶしたエビ、海の塩を振りかけたイカ、薄いパイ皮に包んだヒナ鳥、焼いたマグロ。ああ、なんと大きな焼き立ての切り分けただばかりのマグロ、やわらかな腹肉のステーキのおいしさはどんなに食べ続けても変わらないだろう。」（フィロクセノス『宴会』⁽³⁰⁾）

アテナイオスが苦言を呈しているように、これらのような料理は墮落の象徴としてしば

しばギリシア人を悩ませていた。なぜ魚は良く思われなかったのか、ブルケルトは次のように述べている。

「ギリシア人にとっては、通例肉食での食事のみが宗教的行為であった。魚はデーメーテル女神の贈り物に対する日常的で俗な“おかず”にすぎない。」（『ホモ・ネカーンス』三章 206）

ギリシア人の祖先たちは、古くから地中海の豊富な海洋生物を食卓に取り入れてきた。紀元前 20 世紀頃のミノア文明の遺跡から、タコを描いた壺やイルカの描かれた壁画が発見されていることは、彼らが当時から海洋生物と慣れ親しんでいた証拠であろう。

しかし、魚はギリシア人において宗教的に神聖な食物であるパン、ワイン、肉に並ぶこととはなく、あくまでも食卓を彩る副食品（おかず）であり続けた。

このオプソンはホメロスにおいても登場する。それは女神カリュプソが自ら組み立てたいかだに乗って旅立つオデュッセウスに与えた饞別の中に見られる。

「仙女は彼に風呂を使わせてから、香を焚き籠めた衣裳を着せ、黒々とした酒の革袋、それにもう一つ、水を入れた大袋、さらに食糧を詰めた袋も筏に積み込み、味の良い副食物もたっぷり添えた。」（『オデュッセイア』第五歌 262）

この「味の良い副食品」にオプソンが使われている（記述では複数形のオプサ）。その中身は、直後にポセイドンによって海に流されてしまった為、我々は知ることはできない。しかし、これは女神が模範的ギリシア人である英雄オデュッセウスに与えた副食品である。ワイン、ワインを割るための水、食糧（パンを作るための大麦）であるならば、「味の良い副食品」の正体は当然肉であっただろう。

— 注

- (1) 蜂蜜やチーズが『オデュッセイア』第十歌 229 などに見られ、『オデュッセイア』第九歌 231 ではオデュッセウスもチーズを食べている。例え話としては梨、ザクロ、イチジク、リンゴといった果物についての記述が『オデュッセイア』第十一歌 576 などに見られる。
- (2) 例として、牛、山羊は『イリアス』第一歌 33 に、羊は『イリアス』第八歌 489 に、豚は先述した『イリアス』第九歌 199 に、猪は『イリアス』第二十三歌 24 に、鹿は『オデュッセイア』第十歌 133 などに見られる。
- (3) 塩を調味料として使っている場面は『イリアス』第九歌 199 のみであるが、『オデュッセイア』第十一歌 97 のテイレシアスの予言に「塩を混ぜた食物を食うこともせぬ人間たち」という記述があることから、オデュッセウスを含むギリシア人は料理に塩を日常的に使用していると考えられる。また、『オデュッセイア』第三歌 447 には、塩の代わりに酒をまぶしている場面が見られる。
- (4) 『図説ギリシア人の暮らし』P.110、『古代ローマの料理と食文化』P.35
- (5) ギリシア人は海洋生物を食べる際はほぼ必ず火を通したが、牡蠣とウニや一部の貝類に関しては我々と同じように生のまま食した。（『食悦奇譚』P.187）

- (6) 「ギリシア神話と風土」 P.86
- (7) 『仕事と日』 650 ヘシオドスはボイオティア地方の寒村アスクラに住み、航海は人生で一度しか行わなかったという。(『仕事と日』、松平千秋訳、岩波文庫、1986、P.179 解説)
- (8) 「その冬の日には「骨無し」が、火の気もなく惨めな棲家で、おのれの足を齧っておる。」(『仕事と日』 523)
- (9) 『オデュッセイア』第十二歌 277 に「陸に上れば海に囲まれた島の上で、旨い夕食を作れるものを」とあり、調理は陸で行っていたことがわかる。
- (10) 『ギリシア喜劇全集〈別巻〉ギリシア喜劇案内』 P.149
- (11) 『ギリシア悲劇入門』 P.15
- (12) 『オイディプス王』 1459
- (13) 『キュクロプス』 383
- (14) ギリシア人は宴会の際、横になって食事をする慣習があったが、ホメロスでは椅子に座って食事をしている。この様子は『アエネーイス』等にもみられる。当時まだこの風習が広まっていなかったということも考えられるが、詳しくはわからない。少なくとも、ウェルギリウスの時代には確実に浸透していたため、こちらはホメロスの影響だろう。
- (15) この8年後には悲劇もレーナイア祭での上演が認められた。(『ギリシア喜劇全集〈別巻〉ギリシア喜劇案内』 P.105)
- (16) 『ギリシア喜劇全集〈別巻〉ギリシア喜劇案内』 P.152
- (17) タマネギ、ニンニク、チーズ、干しイチジク等は腐りにくく、また火を使わずにそのまま食べられるため、兵士や庶民の携行食として親しまれていた。(『食べるギリシア人』 P.84)
- (18) 『女の平和』 230
- (19) 『ダフニスとクロエー』では、海賊に誘拐されるといった冒険と呼べるような事件こそ起こるものの、舞台であるレスボス島外に出ることはなく、異国を旅するといった要素は見られない。
- (20) 『ギリシア・ローマ時代の書物』 P.41
- (21) 『オデュッセイア』第三歌 430
- (22) 『ギリシャの神話と儀礼』 P.81
- (23) 『古代ギリシア人』 P.5
- (24) 『ホモ・ネカーンス』三章 208
- (25) ポセイドンの妃アムピトリーテー(『オデュッセイア』第十二歌 70)、海の老人ネーレウス(『オデュッセイア』第六歌 365)、アキレウスの母テティス(『イリアス』第九歌 410 等)、オケアノスはテテュスとの間に 3000 の河川と 3000 の娘をもうけたという(『ギリシア神話』一卷 2-2)。この他にも多くの海神がいるが、重要な神話は少なく、むしろ海は多くの怪物の住まう異界といった側面が強い。
- (26) 『イリアス』第十四歌 153
- (27) スタティウス『アキレイス』一卷 133-134 行、267-271 行 (Stace, Achilléide, Les Belles Lettres, 1971)
- (28) 『ギリシア神話』第三巻 3.2
- (29) 『ギリシア神話』第一巻 5.1
- (30) 『古代ギリシア・ローマの料理とレシピ』 P.60

—— 参考文献 (原典、その他を分けて記載)

『イリアス』上/下、ホメロス (松平千秋訳)、岩波文庫、1992

『オデュッセイア』上/下、ホメロス (松平千秋訳)、岩波文庫、1994

『アエネーイス』ウェルギリウス (岡道夫・高橋宏幸訳)、京都大学学術出版会、2001

『アルゴナウティカ』アポロニオス・ロディオス (堀川宏訳)、京都大学学術出版会、2019

『アレクサンドロス大王物語』伝カリステネス (橋本隆夫訳)、ちくま学芸文庫、2020

『エペソス物語』クセノポン (松平千秋訳)、『世界文学大系』64「古代文学集」、筑摩書房、1961 に収載

『ダフニスとクロエー』 ロングス (松平千秋訳)、岩波文庫、1987
『カイレアスとカッリロエ』 カリトン (丹下和彦訳)、国文社、1998
『レウキッペとクレイトポン』 アキレウス・タティオス (中谷彩一郎訳)、京都大学学術出版会、2008
『エティオピア物語』 ヘリオドロス (下田立行訳)、国文社、2003
『ギリシア悲劇全集』 全 13 巻+別巻 1、松平千秋訳、岩波書店、1990~1992
『ギリシア喜劇全集』 全 8 巻+別巻 1、野津寛 他 訳、岩波書店、2008~2012
『新版 アリストテレス全集』 全 20 巻+別巻 1、金子善彦 他 訳、岩波書店、2013~2020
『ギリシア神話』 アポロドーロス (高津春繁訳)、岩波文庫、1953
『ソクラテースの思い出』 クセノフォーン (高津春繁訳)、岩波文庫、1953
『国家』 上/下、プラトン (藤沢令夫訳)、岩波文庫、1979
『変身物語』 上/下、オウィディウス (中村善也訳)、岩波文庫、1981
『神統記』 ヘシオドス (廣川洋一訳)、岩波文庫、1984
『仕事と日』 ヘーシオドス (松平千秋訳)、岩波文庫、1986
『食卓の賢人たち』 全 5 巻、アテナイオス (柳沼重剛訳)、京都大学学術出版会〈西洋古典叢書〉、1997~2004
『ギリシヤ神話集』 ヒュギーヌス (松田治・青山照男訳)、講談社学術文庫、2005

青柳正規、『トリマルキオの饗宴』中公新書、1997
石毛直道監訳、『ケンブリッジ世界の食物史大百科事典 1』朝倉書店、2005
呉茂一、『ギリシア神話』新潮社、1979
周藤芳幸、『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会、2006
高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960
高島純夫他、『図説 ギリシアの暮らし』河出書房新社、2018
高平鳴海、『図解 食の歴史』新紀元社、2012
丹下和彦、『ギリシア悲劇入門』未知谷、2021
丹下和彦、『食べるギリシア人』岩波書店、2012
塚田孝雄、『シーザーの晩餐』朝日文庫、1996
塚田孝雄、『食悦奇譚』中公文庫、1999
ドルビー・アンドリュウ、グレインジャー・サリー (今川香代子訳)、『古代ギリシア・ローマの料理とレシピ』丸善、2002
バトリック・ファース (目羅公和訳)『古代ローマの食卓』東洋書林、2007
ブルケルト・ヴァルター (橋本隆夫訳)、『ギリシヤの神話と儀礼』リプロポート、1985
ブルケルト・ヴァルター (前野佳彦訳)、『ホモ・ネカーンス——古代ギリシアの犠牲儀礼と神話』法政大学出版局、2008
モーゼス・I.フィンレー (山形和美訳)、『古代ギリシア人』法政大学出版局、1989
ルプレットル・ブリギット (海田芙柚悛訳)『古代ローマの料理と食文化—現代に蘇るレシピ 35』三恵社、2020
藤縄謙三、「ギリシア神話と風土」、『史林』、51 巻 2 号、1968、p.73-108
遠沢葆、「航海の立場から見たホメーロス時代の航路について」、『日本航海学会誌 NAVIGATION』、51 号、1977、p.9-15
四十九院仁子、四十九院静子、「ギリシアのパスハ (復活祭) と食生活」、『日本食生活学会誌』、21 巻 2 号、2010、p.159-165
四十九院仁子、四十九院静子、「ギリシアのドデカイメロ (Δωδεκαήμερα) と食文化」、『日本食生活学会誌』、22 巻 2 号、2011、p.159-165

*本稿は2021年度の修士論文「英雄の食卓——ギリシア文学における食文化についての考察」を再編したものです。

執筆にあたって、指導教員として数年にわたり多大なご指導ご鞭撻を賜った松村一男先生に深く感謝申し上げます。

また、松枝到先生並びに坂井弘紀先生には副査として、多くの助言を賜りました。深く感謝申し上げます。

おわりに、岡本有子先生には松村研究室のゼミ生として、執筆にあたり終始助言と刺激をいただきました。深く感謝申し上げます。